



## 結核の予防と早期治療

結核は、結核菌によって発生するわが国の主要な感染症の一つで、毎年新たに2万人以上の患者が発生しています。

結核は、空気感染を起こし、肺の内部で結核菌が増え、咳、痰、呼吸困難などを引き起こすことが多いですが、肺以外の腎臓、骨、脳など身体のあらゆる部分に影響を及ぼすことがあります。

また、結核菌に感染した場合、必ずしもすぐに発症するわけではなく、体内に留まった後、再び活動を開始し、発症することがあります。

免疫力が弱まっているときは、結核菌が再び活動を始め、

する結核肺がん検診を必ず受けましょう。

## 10月1日から定期予防接種となるもの

10月1日から、水痘（水ぼうそう）と高齢者の肺炎球菌感染症の予防接種が定期予防接種に追加されます。

詳細は別途お知らせします。概要は次のとおりです。

なお、平成26年度に水痘予防接種、高齢者の肺炎球菌予防接種の対象となる人には、個別通知をする予定です。

対象となる人の中には、誕生日によって定期予防接種として受けられる期間が限られている人が含まれていますので、ご注意ください。

▼水痘（水ぼうそう）予防接種  
対象  
生後12月から生後36月に至るまでの間にある人

▼経過措置 平成26年度に限り、生後36月から生後60月

に至るまでの間にある人も対象で、1回接種とします。（この経過措置は、平成27年度以降はありません。）

▼接種回数  
2回接種（3月以上の間隔をおく）

※2回目の接種が生後36月を超える場合は、2回目の接種はしません。

▼標準的な接種期間 生後12月から生後15月に至るまでに初回接種（1回）、追加接種は初回接種終了後6月から12月に至るまでの間隔をおいて接種（1回）

▼接種費用 無料  
※すでに水痘に罹ったことのある人は、接種対象外です。  
※任意接種として、すでに水痘ワクチンの接種を受けたことがある人は、任意接種を受けた回数から差し引きます。

▼高齢者の肺炎球菌予防接種  
対象  
平成26年度から平成30年度

までの間は、各当該年度内に65、70、75、80、85、90、95、100歳となる人  
・101歳以上の人（平成26年度限りで、平成27年度以降は対象になりません。）  
・60歳以上65歳未満の人であって、心臓、腎臓もしくは呼吸器の機能またはヒト免疫不全ウイルスによる免疫の機能に障害を有する人  
※任意接種として、すでに肺炎球菌ワクチン（ポリサッカライド）の接種を受けたことがある人は、対象外です。特に、過去5年以内に、肺炎球菌ワクチン（ポリサッカライド）を接種した人は、同剤の接種により注射部位の疼痛など副反応が強く発現しますので、再接種しないようご注意ください。  
※平成31年度以降の対象者については、改めて国が検討する予定です。

▼接種回数 1回接種（肺炎球菌ワクチンポリサッカライド）  
▼接種費用 検討中



巻之百十

## 刀匠と名将シリーズ 1 祐定と黒田官兵衛

戦国時代、長船鍛冶は長船の地で作刀していただけではなく、棟梁のもと、工房ごとに、赤松家、浦上家、尼子家、宇喜多家、三村家などの近在する各大名のお抱えとなり、敵味方となって、戦場での刀剣の修繕や作刀を行っていたと考えられています。

長船鍛冶の祐定は、室町時代中期（今から550年ほど前）から代々「祐定」を通り名として続いた刀工一族です。

刀工銘鑑を見ると現代までに約130人もの祐定がいたようです。兄弟、親戚、弟子など、祐の字を冠した刀工はさらに多く、日本一の刀工一族といえます。そのため現存する刀

剣の中で、最も多くの作品が残っているといわれています。

祐定は、作刀のために一族郎党で大工房を形成し、戦国大名からの特別注文を受けつつ、足軽用の大量生産品も作っていたと考えられ、注文打ちと数打ちと多岐にわたる作風が残されています。

さらに、その名前にあやかって江戸時代初期頃からすでに偽物が制作され流布し、祐定の銘が刻された作品はなおさら多くなりました。

## 黒田官兵衛の愛刀「安宅切」

戦国大名として伸張していく黒田官兵衛の所持した愛刀の中に、祐定の作刀したもの

があります。現在、重要文化財に指定され、「刀 銘 備州長船祐定」という指表（刀の外側）の銘の横には「あたき切 脇毛落」と金象嵌（彫った部分に金をはめこむ技法）が施されています。

この刀は、刀身よりも拵（外装）が貴重で国指定されたものです。その拵は、国宝の「へし切長谷部」の拵のデザインを基となったものとして有名です。「安宅切」は祐定の作としては必ずしも上作（優れたもの）ではありませんが、黒田官兵衛が所持し、さらに、淡路の武将・安宅河内守を討ち取った刀として、「安宅切」と号までついており、世に

振りしかなかった刀です。現在、福岡市博物館が所蔵しています。



備前おさふね刀剣の里で行なわれる古式鍛錬（上）／備前長船刀剣博物館の館内展示（下）

## 諸将が愛した祐定の刀

その他、黒田官兵衛の孫である忠之が所持したという脇指も祐定の作（個人蔵）で現存していたようです。

同時期に活躍した、尼子十勇士の山中鹿介所持と刻されている祐定も残っています。豊臣秀頼と徳川家康の二条城での会見時、秀頼のボディガードとして付き添っていた加藤清正が懐に忍ばせ

ていたのも祐定の短刀（熊本県本妙寺蔵）でした。

瀬戸内市長船町出身の小説家・土師清二の『江戸城炎上』での剣戟（刀剣による戦い）のシーンに「永正祐定」の刀が登場し、倉敷市出身の本山荻舟の『名剣士名刀匠』でも永正祐定が取り上げられています。祐定は、こうした小説に取り上げられるほど知名度があった刀工の一族です。